〔書　評〕

宮地裕著

『敬語・慣用句表現論

――現代語の文法と表現の研究(二)――』

蒲谷　宏

はじめに

本書は，敬語表現，受給表現および慣用句の表現を中心とした18編の論考を，部分的に補足・訂正し，収録した論文集である。

本書の構成，および各論考の出典は，以下の通りである。

第一章　敬語表現

一　敬語概観　（「待遇表現」『言語行動と日本語教育』1985）

二　敬語の混乱（『言語生活』1957・7）

三　敬語と文法（『文論』（旧版）1971）

四　敬語の分類（『文論』（旧版）1971）

五　現代の敬語（「現代敬語の一考察」『国語学』72　1968）

（「現代の敬語」『講座国語史　第5巻　敬語史』1971）

六　謙譲語とその周辺（『文論』（旧版）1971）

七　敬語史論　（『講座日本語学9　敬語史』1982）

第二章　受給表現

一　「やる・くれる・もらう」を述語とする文の構造について（『国語学』63　1965）

二　受給表現補助動詞「やる・くれる・もらう」発達の意味について（『鈴木知太郎博士古稀記念国文学論攷』1975）

第三章　慣用句の表現

一　成句の分類（『語文』32　1974）

二　成句の用法（「『成句』の二三の用法について」『文学・語学』74　1974）

三　慣用句と連語成句（『日本語教育』33　1977）

四　動詞慣用句（『日本語教育』47　1982）

五　基本語彙・慣用句・複合語（『日本語学』1984・2）

六　慣用句の周辺――連語・ことわざ・複合語――（『日本語学』1985・1）

七　日本語教育基本慣用句二〇〇句（『奥村三雄教授退官記念国語学論叢』1989）

第四章　倒置表現

一　倒置考（『日本語学』1984・8）

第五章　順接・逆接の表現

一　二文の順接・逆接（『日本語学』1983・12）

1　著者の理念

本書全体を貫く著者の基本的な姿勢は，次のような記述に端的に現われていると言えるだろう。

「言語の真実を追求するのに，……，用語やその概念内容自体よりは，それが有効な視点や武器となって，結果として体系的な論述が生まれたり，言語の本質へのふかい洞察をふくむ論究が生まれたりすることのほうが，よほど価値あるとおもわれる。」(p. 237)

「……，この敬語の意識ないし特色や，敬語の分類に関する解釈と推論とは，いずれはひるがえって日常卑近なことばづかいの個別の事実を，ねがわくは真実をとらえて位置づけることができるものでありたいという，ひそかな，しかし歴然たる願望を持つものというべきであろう。」(p. 97)

著者の言語研究における目的は，〈言語の本質を追究すること〉と同時に〈言語の実態を解明すること〉にあると思われる。

両者は異なる目的であるように見えるが，著者は，言語というものの本質を言語行動そして言語生活の中に見出そうとしているのであり，その意味では両者は相反するものではなく，いずれもが著者の言語研究の理念に基づくものであると言えよう。

本書においては言語観に関する記述はないが，前著『新版文論――現代語の文法と表現の研究(一)――』「序章　言語　二　言語観」において，次のように述べられている。

「要するに，わたくしは，静態的に言語を観察記述することと，動態的に言語を考察論述することとは，弁証法的に止揚されつつ，言語の真実の追求がなされるべきだとかんがえているのである。」(p. 17)

また，次のような記述は，言語研究と言語教育のあり方に関する基本的な考え方を示唆するものであり，そこにも著者の理念が現われていると言える。

「個々の慣用句の意味・用法の記述も大事だし，慣用句の分類論・体系論も大事だが，教育とのかかわりもふかい基本慣用句の調査・記述は，それらを左右の橋脚として構築される橋のようなものだから，結果としての基本慣用句一つ一つについて，その位置づけや意味づけを明確にし，なるべく詳細な注解が付けられることがのぞましい。」(p. 336)

本書においては，言語事象を精査し，体系づけていくことの重要性を踏まえつつも，言語研究，言語教育研究の重要な目的が言語行動や言語生活の中にあることを見据えていくという著者の姿勢が感じられる。言語観を「静態的」，「動態的」という別によって捉え，後者を重視しながら，しかし両者のバランスをとって言語研究，言語教育研究を進めるといった研究姿勢は，大方の支持を得るものであろう。本書全体から学ばなけれ

ばならない大きな点は，このような研究姿勢を持つということであると言えるだろう。

著者の言語研究，言語教育研究に対するこのような理念は，当然，個々の論考にも反映されている。以下，各論考に対して述べていくことにするが，筆者が具体的に評し得る点は第一章，第二章が中心となる。しかも，これらは，現代敬語研究における先駆的な業績として，すでに評価の定まったものが多い。したがって，現時点で筆者が評すべきことでもないのだが，これらの論考が新たに一書にまとめられたことの意義の大きさを認識しつつ，管見を述べることとしたい。

2　古代敬語と現代敬語

まず，古代敬語に対する現代敬語の特質の問題であるが，著者はそれを，(1)相対的社交敬語であること(2)場面的受恵敬語であること，の二点にまとめている。

「古代敬語は，階層的規範性にもとづいて，敬譲の意識でつかわれる傾向がつよいものであった。これに対して現代敬語は，社交的場面にもとづいて，礼儀の意識でつかわれる傾向がつよいものである。

要するに，「礼儀の意識」にもとづく「礼の敬語」ということが現代敬語の特質だとおもう。」(p. 6)

そして，(2)の背景にある意味を次のように記述する。

「事態の受給表現の発達が，概略，中世末期以降のことだとして，それが古代にはなかった現象だという意味で，近代日本語の特徴的事実の一つだとのみ言いたいわけではない。それはそれでいいけれども，この事実の意味はもうすこしおおきいものをふくんでいるのではないかと，わたくしはおもう。つまり，古代敬語から近代敬語への変化と対応することなのであり，大局から言って敬語の単純化をおぎなうかのごとく発達してきたのが，この事態の受給表現だと見ることができるのではないかとおもうのである。」(p. 208)

これが，著者の敬語史に関する大胆な見解とも言える仮説である。現代敬語における受給表現の重要性だけではなく，それが敬語史上における重要性を持つものだと説く点に大きな特色がある。こうした捉え方そのものが，上述した著者の研究理念の反映であると言えるだろう。著者は，歴史言語学というものを言語，言語行動を包括した言語生活の学であると捉えている（『新版文論』p. 26）が，それはいわゆる国語史研究と必ずしも同義ではない。大胆な仮説を提唱するためには当然実証的な裏付けが必要になるのだろうが，実例の集積からだけでは導くことのできない真実を明らかにするためには，言語に対する研究者の鋭い勘が働かなければならない。この説の当否を現時点で論じることはできないが，受給表現という極めて身近な表現において，言語生活の学としての歴史言語学の仮説が提示されるという点は，大変刺激的でさえある。

現代敬語に関するまとめは，p. 105 に見られる。首肯すべき見解である。

3　受給表現

「受給表現」については現在も様々な観点からの研究が進行中であると言えるが，受給表現に関する第二章の二つの論考は，受給表現を論じる際の必読論文となるものであり，当然受給動詞に関する文法的な研究においても参考にされるものである。しかし，この論考の真の価値は，文法論だけでもなく，表現論だけでもない，言語，言語行動，言語生活といった連関の中において受給表現を考察するための基礎となる点にあるのだと思う。それが待遇表現研究のあり方を示すものとなっていることは言うまでもない。

「……従来の敬語論では，意味的に，はっきり上位下位関係の感じられるものだけを，直観的に切りとって対象としてきた。それも，それなりの対象限定の方法ではあろうが，そのためにアスペクト表現との関連が問われることがほとんどなかったとおもわれる。筆者は，そこに連鎖的な関連をみとめようとするものであって，敬語表現をひろく待遇表現のなかに位置づけるためにも，具体的な一つの手がかりになるようにおもう。」(p. 138～p. 139)

4　敬語の分類に関して――「詞・辞」の問題――

現在の敬語研究においては，多少の異同があったとしても，基本的には著者の分類が踏襲されることが多い。著者も述べておられるように敬語の分類や術語そのものが重要なのではないが，特に「丁重語」の提唱は，敬語研究における重要な分岐点になるものだと言えるだろう。

ここではまず，著者が乗り越えるべき課題としてあった「詞・辞の敬語」という捉え方に対する記述について検討したい。現時点では「詞・辞」という観点から議論すること自体の問題点もあるだろうが，敬語研究の歴史においては論ずべき必然性のあった課題であることは言うまでもない。

「……現代敬語の分類は，左記のようになる。

〈一〉　尊敬語＝話題のひとの行為・所有などについて，話し手がそのひとへの配慮をあらわす敬語

〈二〉　謙譲語＝話題の下位者の上位者に対する行為の表現をとおして，話し手がその上位者への配慮をあらわす敬語

〈三〉　美化語＝話題のものごとの表現をとおして，話し手が自分のことばづかいの品位への配慮をあらわす敬語

〈四〉　丁重語＝話題のものごとの表現をとおして，話し手が聞き手への配慮をしめす敬語

〈五〉　丁寧語＝話し手が，もっぱら聞き手への配慮をしめす敬語

このようなかんがえかたは，もはやあきらかなように，現代敬語は〈一〉から〈五〉

へ，「詞的な敬語」から「辞的な敬語」へ，分断しにくい系列をなしているということとともに，いずれにも，「話し手の配慮」をみとめる点で，完全な「詞の敬語」をみとめがたいことをしめす。また，とくに「詞的な」というのは，完全な「詞の敬語」をみとめがたいことのほか，一般の語性分類での詞辞の区分と同様には，敬語の詞辞をわかちがたく，敬語は，もともと，詞辞の結合形態，時枝学説での「句」以上の問題，さらには，ひろく待遇表現の問題として論じられるべきことのふくみをもっている。」(p. 69)

あえて言えば，敬語表現に常に「辞的要素」が含まれることは，「敬語表現のレベル」においては確かなことであろう。その意味では，「使用の実態から考慮すれば，単純な「詞の敬語」を持たない」とも言えるわけだが，尊敬語や謙譲語といった「敬語のレベル」においてそうした観点を持ち込むことは，かえって敬語の分類を混乱させるものになるのではないかと思われる。

例えば，学生が「山田先生はいらっしゃいますか。」と表現したときに，「いらっしゃる」に話し手の何等かの配慮が見られるから「いらっしゃる」という敬語には辞的な性質がある，という説明をしたのでは，かえって敬語の本質を見誤らせることになってしまうように思う。「いらっしゃる」という敬語自体には，そうした意味での辞的性質はないと考えるほうがよいのではないだろうか。

筆者は，敬語を抽象的に捉えた場合と，実際の表現の中で使われている場合とを分けて扱う必要があると考えている。前者を「言材」としての敬語，後者を「語(句)」としての敬語と呼び，両者を区別している。敬語自体の基本的な性質と，話し手が上位者に対して配慮することや品位を表そうとすることとは次元の異なるものとして区別しておく必要があると考えるからである。「いらっしゃる」の持つ敬語としての抽象的な性質は，「その動作・状態の主体を高くする」というものではあるが，常に「高くする」という性質で説明がつくわけではなく，例えば，親が子供に「早くいらっしゃい。」と言うような実際の表現の中で使われている「いらっしゃい」の働きは，もちろん，動作主体である子供を高く待遇しようとするというものではない。しかし，だからといって「いらっしゃる」の敬語的な性質自体が変わってしまうということではなく，あくまでも「言材」としての「いらっしゃる」は「尊敬語（筆者は「直接尊重語」と呼ぶ)」なのである。そのことと，「早くいらっしゃい。」という「敬語表現」において「いらっしゃる」が命令の形として用いられ機能しているということとは区別して考える必要があるわけである。敬語と敬語表現のレベルとを区別して捉えることによって，敬語の基本的な性質と機能とがより明確に記述できるのではないかと考えている。(蒲谷・川口・坂本（1998)『敬語表現』第II章を参照されたい。) 著者の「語論レベルで分かたれる「詞の敬語」「辞の敬語」あるいは「素材敬語」「対者敬語」の別と，その使用・運用レベルでの敬語の別とは，区別しておく必要がある。」(p. 158) という主張の趣旨も，そのように解釈すれば理解できるものとなる。

5　尊敬語・謙譲語

尊敬語と謙譲語の共通性・相関についても触れてあるが，これは重要な指摘である。

「要するに，尊敬語は，一面ではものごとの内容とともに話し手の直接の敬意的配慮の対象を持つ点で丁重語に類するところがあり，一面では話題の人物をその対象とする点で謙譲語と同類である。謙譲語は，話題の上位者が，上位下位関係の行為表現をとおして，話し手の敬意的配慮の対象となるという間接性のゆえに，話し手からの敬意的配慮の直接性において共通する丁寧語・尊敬語の一群からはとおいとも言える。しかし，謙譲語による表現の下位者が，話し手がわの人物や話し手自身であることもしばしばあって，その性質を重視すると，行為関係は一般に逆だが，敬意関係においては尊敬語に類することになる。以上のような相関が見られると言えよう。」(p. 101)

謙譲語についての考え方も，上の問題との関係で捉える必要があるだろう。

「筆者のかんがえでは，謙譲語は，話題の人物間の，上下関係の行為の授受の認定を通して，話し手が，その上位者のほうに敬意をしめすことが原則だ，とおもう。」(p. 142)

6　謙譲語・丁重語

先にも述べたように「謙譲語」と「丁重語」とを区別することは極めて重要な指摘であった。「うかがう」と「まいる」との違い，「申し上げる」と「申す」との違いは，単に分類上の問題だけでなく，それらの敬語が持つ場面性との関わり(「改まり」の有無)が実際の敬語表現上の違いとして反映する点が重要なのである。これはさらに言えば，敬語表現教育にも関わってくる事柄である。ただし，細かいことではあるが，「存ずる・存じ上げる」がともに丁重語として括られており，その用法の違いには特に言及されていない。「存じ上げる」に謙譲語の用法があることの指摘もほしいところである。

なお，「お・ご〜いたす」の二重性に関しても適切な記述が見られる。

「……したがって，こういう「お訪ねいたします」の「お……いたし」は，「関係謙称」「関係下位主体語」の面と「丁重語」の面との，二面を持つ二重性格の敬語だと言うことができる。」(p. 147)

7　美化語・丁寧語

美化語，丁寧語についても現在の状況を見越したような記述が見られる。

「相互の敬意的配慮よりは，それぞれが社交上の品位を維持しようとする配慮から，この「—です」「—ます」がつかわれるとすれば，これらは，すでに丁寧語というよりは美化語というべきであろう。」(p. 82)

また，「—であります」を丁寧語と認めた点 (p. 95) には，先見の明ありと言うべきだろう。

8　待遇表現・待遇表現教育

著者には敬語というものを常に待遇表現の観点から捉えるという姿勢が見られるわけだが，待遇表現の捉え方に関する指摘として，次のような記述がある。

「名称そのものに，あまりこだわることはないが，言語体系としての「敬語・常語・卑語」ということも，場面を考慮に入れると，一般に敬語表現とされるものが，ばあいによっては常語あるいは普通体になり，常語表現とされるものがぞんざい体になることがあるというわけである。つまり，三者の別は，相対的にはつねにみとめられるけれども，場面によっては同一の表現が敬語であったり常語であったりする。固定的な不変なものではないと言わなければならない。

待遇表現の複雑なところは，ひとつにはこういうところにある。」(p. 4)

待遇表現というものを固定的に捉えるのではなく，場面による相対的なものとして捉えることの重要性を的確に指摘している。このような言語研究における場面の重要性を主張している点は，著者の基本的な研究姿勢を反映したものであると言えよう。

著者の関心は必然的に待遇表現教育にも及び，日本語教育における待遇表現教育の基本的な考えを述べている。言語についての知識を言語行動・言語生活の中でどう生かすかを重視している点に，著者の言語教育観が現われていると言えよう。これは，国語教育にも適用されるべき考えであろうかと思う。

また，日本語教育へ以下のような提言もなされている。

「日本語教育では，外国人の日常会話の基本がデス・マス調であること，それがむしろ常語・常体というべきものであって，ダ調を使うにはむしろ慎重でなければならないこと，とくにダ調の「行くよ」とか「だめじゃないか」とかいうのが親密さの表現だと，安易にかんがえるのはあぶないということ，などが指導されることになろう。」(p. 4)

おわりに

本書を真に理解するには，本書全体の底に流れる，言語研究観，敬語観，待遇表現観というものを理解しておく必要があると思う。

今後の敬語研究に基本的な指針を与えるものであると同時に，言語の研究，教育に携わるすべての者にとって価値ある書であると言えよう。

(1999 年 9 月 20 日発行　明治書院刊　A 5 判　396 ページ　本体価格 11000 円)

——早稲田大学教授——

(2000 年 11 月 14 日　受理)